ミステリーの愚痴話相談所

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミスチーの愚痴話相談所

【Nコード】

N01600

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

あらすじ

ここはミスティアの鰻屋。ここに悩める幻想の住民が、次々と愚痴りにきちやいます。暇つぶし程度にどうぞ。

（前書き）

前書き

この話には、敬語口調のミスチーと、名前を伏せられた東方キャラが出てきます。

東方がわかる人ならよくわかると思いますけど、わからない人はまずわかりません。

そう言った所を承諾して、このお話をお読みください。ではどうぞ。

シチュエーション設定

いつものように鰻屋をやっていたのだが、客入りが悪いと言う事で愚痴相談を始めたミスチー。

場所は不明。月明かりの綺麗な夜。

ミ「さーてと、今日はどんなお客さんがくるかな？お、いらっしやうい。あなたは愚痴を言いに来た口ですか？」

？「そうね・・・」

ミ「そうですか。まあ遠慮せず言っちゃってくださいね。ここで言った事は絶対他言しませんから。」

？「そう・・・じゃあ言うわね・・・最近思うんだけど、ちょっと金髪のキャラ増えすぎじゃないかしら？これじゃ私の立場が危ういのよね・・・魔理沙と違って私はあくまでパートナーポジションだから、いつ代わってもおかしくないのよね・・・」

ミ「なるほど。でもあなたなら大丈夫ですよ。あなたにはあなただけの個性があるんですから。」

？「でも現状はそんな楽なもんじゃないわよ・・・魔理沙だって私の家より図書館にばかり行くし・・・そのままパートナー完全チエンジすらありうるわよ・・・」

ミ「大丈夫ですって。そんなに心配なら、いつその事思い切ってイメチエンしてみませんか？」

？「イメチェン？今の私からどう変わるのよ？」

ミ「単純です。いつも使ってる物をインパクト溢れる物にするんです。」

？「インパクト？別に上海を違うのにしても仕方ないんじゃない？」

ミ「ですから、もっとインパクト溢れる人形にするんです。例えばこれ！」

？「・・・これ・・・何？」

ミ「知りませんか？カーネ 人形と食いだお 人形ですよ。」

？「で・・・それを私に使えと？」

ミ「そうです。これだけのインパクトがあれば、誰にも負けませんよ！」

？「・・・何て言うか・・・何かと引き換えに大切な物を失くしそうなんだけど・・・。」

ミ「もう、決断力がありませんね。それじゃ二番手の座は奪われま
すよっ。」

？「そ、それは困るわね・・・。」

ミ「だったら、つべこべ言わずにほら！お代は出世払いでいいです
よ。」

？「・・・わかったわ・・・ありがとう・・・」

ミ「いいんですよ。これもあなたの為ですから。」

そう言つとその客は二体の人形を引きずつて帰つていった。ぶつぶつと何かを言いながら・・・

ミ「あの人形、確か紫さんから貰つた人形だったかな？処理に困つてたから、丁度よかつた。さて、次のお客さんはどんな人かな？」
おっと、そんな事言つてたら来た来た。いらつしゃい。」

？「ここつて・・・愚痴とか聞いてくれるのよね？」

ミ「はいそうですよ。どんどん言つちやつて下さいね。」

？「そう。なら遠慮なく言つわ。いつになつたら私つて樂できるのかしらねえ。いくらおぜうさまの為とはいえ、もう少し他の連中も頑張つて欲しいわ。ちゅ・・・門番は職務怠慢上等だし、妖精達は言つまでもなし、最近住み込みでいる人間もなんだかだし・・・」

ミ「あらら、それはさすがにしんどいですね。それなら何もしない日でも作つてみたらどうですか？」

？「何言つてるのよ、そんな事したら誰が屋敷の仕事を・・・」

ミ「そう、それですよ。あなたは確かにすごいですし完璧です。でもそのせいでみんなあなたに頼つてしまふんですよ。あれもやる、これもやるでは部下は成長しません。上司であるあなたに必要なのは、崖に突き落としも上つてくる我が子を信じて見届ける・・・ラ

イオンの父の心です。」

？「でも……」

ミ「大丈夫ですよ。完璧なあなたのそばにいる日々は、部下の人たちにとって無駄になっている訳がありません。今のあなたが信じていれば部下の人たちはきつと応えてくれます。」

？「……確かにそうかもね……そう考えてたら……なんだか楽になつてきたわ……ありがとうね……」

ミ「いえいえ、私はただあなたの愚痴を聞いていただけですよ。」

そしてその客は肩の荷が下りたかのように帰っていった。

ミ「一人で頑張るのもいいけど、誰かを信じるのも必要ですよ？メイド長さん。っと、もう次のお客さんが来てるね。はいはい、あなたも愚痴を言いにきましたか？」

？「はい。幻想郷にいてつくづく思うんですけどね、みんな全然新聞読んでくれないんですよ……こっちは見てもらおうとヤツケになつてるのに……」

ミ「おや？新聞記者らしくない発言ですね。」

？「……何が言いたいんです？」

ミ「いえ、記者というのは己を信じてやるものですから、他者に媚びるものではないはずでしょう？今のあなたは記者として何か間違つてはいないですか？」

？「・・・確かにそうですね・・・」

ミ「たとえ見る人がいなくてもそれは問題にするものではありません。あなたの伝えたい事がただ興味をもたれていないだけなのですから。」

？「・・・思えば・・・忘れていましたね・・・そういう事を・・・」

ミ「どうでもいいかもしれませんが、私はあなたの新聞をよく見えていますよ。」

？「え！？そうだったんですか？では感想などはありますか？」

ミ「そんな大層な物ではありませんけど、世間事情を知れるのはいいものですよ。」

？「そうですか。そうですね・・・なぜみんなはそういう事がわかってくれないのでしょうか・・・」

ミ「まあ正直言いますと、この幻想郷でそこまでの情報をみんな必要としてないんですよ。」

？「あ・・・やっぱりそうなりますよね・・・」

ミ「でもさっき言ったと思いますけど、新聞は自分のやりたいように、自分の伝えたい事を書いていければいいんですよ。もしあなた自身の思いが伝われば、おのずとみんな読んでくれますよ。」

(後書き)

駄文駄文駄文駄文駄文駄文駄文駄文駄文駄文駄文駄文
駄文駄文駄文駄文

後書き

ははは、これはまるでごみのようだ!!

まずごめんなさいm() () m

恐らく歴代で一番ひどい作品かもしれません。てか小説じゃないです
ね完全に。

こんな駄目話に付き合ってください。た読書のみなさま、本当にあり
がとうございました。m() () () m

澄田は他の短編も鋭意執筆中ですので、そちらにもご期待ください
ませ。

スペシャルサンクス

ミステリア・ローレライ 様

アリス・マーガトロイド 様

十六夜 咲夜 様

射命丸 文様

では、このような粗末すぎる物をお読みいただき、真にありがとうございます。
ございました。

by 澄田 康美

P.S、書いていた当時は作者真面目でした。本当です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0160o/>

ミスターの愚痴話相談所

2010年10月28日04時10分発行